

錢形平次捕物控

瓢箪供養

野村胡堂

青空文庫

「あ、八じやねえか。朝から手前てめえを捜していたぜ」

路地の登あしおと音を聞くと、銭形平次は、家の中からこう声をかけました。

「へエ、八五郎には違ちがえねえが、どうしてあつしと解とつたんで？」

仮住居かりずまいの門かどぐち口に立つたガラツ八の八五郎は、あわてて弥蔵やぞうを抜くと、胡散うさんな鼻のあたりを、ブルンと撫なで廻ますのでした。

「橋がかりは長ながえやな、バツタリバツタリ呂律ろれつの廻まらねえような足取りで歩くのは、江戸中捜なしたつて、八五郎の外にはねえ」

平次は春ひだまの陽溜ひだまりにとぐるを巻まきながら、相変あらず気楽きなことを言いっているのです。

「へッ、呆あきれたものだ」

「俺おれの方かたでも呆あれているよ。その登あ音おとの聞きえるのを、小半日待まちっていたんだ」

「用事ようじてえのは、何なにですかい、親分おやぢ」

「それが少し変かつているんだ。手前てめえ、昨日きのう瓢箪ひょうたん供養くように行いつたつけな」

「行つてみましたよ、筆供養や針供養はチヨクチヨクあるが、瓢箪供養てえのは江戸開府以来だ、あれを見ておかねえと、話の種にならねえ」

「どんな事をやったんだ、一と通り話してくれ、——少し変なことがあるんだが、瓢箪供養の因縁いんねんが解らなきや、見当がつかねえ」

平次は煙管きせるを伸して、腹這いはらばになつたまま一服つけました。

紫の烟けむりが、春の光の中にゆらゆらと流れると、どこかの飼うぐいすい鶯の声が、びっくりするほど近々と聞えます。長閑のじかな二月の昼下がり、——

「因縁へちまも糸瓜へちまもありやしません、——寺島てらしまに住んでいる物持の佐兵衛さへえ、瓢々齋ひょうとうさいとか何とかいって、雑俳ざつばいの一つも捻ひねる親爺おやじで、この男が、長い間の大酒で身体をいけなくし、フツツリ不動様に酒を断つたについては、今まで物好奇ものずきで集めた瓢箪が三十六、大きいのも小さいのも、良いのも悪いのもあるが、持っているるとツイ酒を入れてみたくなるし、人様に差上げて、酒を入れるより外に用事のない品だから、思い切つて向島土手に埋めて供養塔を建てようという趣向しゅこうで——」

「なるほど少し変つているな」

「三十六の瓢箪を自分の手で穴に埋め、その上に『瓢箪塚』と彫つた石を押つ立て、坊主

が三人にお客が五十人ばかり、引導を渡して有難いお経を読んで貰って、それから平石へ行つて一と騒ぎの上、桜餅を土産に帰つて来ただけのこと、何の変哲もありやしません

「ところが変哲なことになつたんだ、——その瓢々齋が昨夜死んだとしたら、どんなものだ」

「えッ」

ガラツ八もさすがに胆をつぶしました。

早耳が何より自慢の自分が、少し間抜けにされたのはいいとしても、昨日あんなに元気で、百までも生きるような事を言っていた瓢々齋が、その晩死のうとは、全く夢にも思わなかつたのです。

「命が惜しくて酒を止した人間が、その晩死ぬなんぞ、少し皮肉すぎやしませんか、親分」
 「届出は頓死だが、——あの辺は石原の利助兄哥の縄張内だ。昼頃変な小僧が手紙を持つて来たんだそうで、お品さんが持つて来て見せてくれたよ」

「手紙にはどんな事が書いてありました、親分？」

「恐ろしく下手な字で、——瓢々齋が死んだのは、病氣や過ちじゃねえ、人に殺されたに

「違うから、お上の手で調べてくれ——とこういう文句だ」

「へエ」

「一応石原の子分をやることにして、お品さんは帰ったが、——フト思い出したのは、二三日前てめえ手前が話していた瓢箪供養のことだ。どうかしたら八五郎のことだから、物好きに行ってみたかも知れないと、手前の来るのを心待ちに待っていたのさ」

「物好きも満まんざら更無駄じやなかつたわけで」

「ハツハツ、ハツハツ、その気でせいぜい間抜けなものは見て歩くがいい」

平次はカラカラと笑います。順風耳じゆんぷうじガラツ八の、倦うむことを知らぬりようきへき猟奇癖が、とんだところで、とんだ役に立つことは、ずいぶんこれまでも無い例ではなかつたのでした。

「おや？ お客様ですよ、親分」

ガラツ八は聴き耳を立てました。

「お品さんらしいな、——こいつは面白くなつて来たかも知れないよ。瓢箪供養は少し変りすぎていると思つたが、やはり変なことになつた様子だ、お品さんが自分で来るようじや真ほんもの物だ」

平次とガラツ八が、寺島まで飛んで行ったのは、その日も暮れ近い頃、石原の利助の子分達がお係り同心とやって来て、検屍けんしもちようど済んだばかりのところでした。

瓢々齋というのは、元横山町で手広く金物問屋をしていた家の主人で、金にも娑婆しゃばつ気にも不足のない男でしたが、たった一人の倅せがれ佐太郎が、素姓のよくない女と一緒にになり、それがきつかけで勝負事に手を出し、果ては金看板きんかんばんのやくぎ者になり下がってからは、いさぎよく久離きゆうり切つて勘当し、自分も商売が嫌になつたものか、横山町の店は人に譲つて、その身しん上しようを、地所と家作おびただと夥しい現金に換え、寺島村の寮に引つ込んで、雑俳ざっばい三味さんまいの気楽な老後を送つていたのでした。

一緒に住んでいるのは横山町の店の支配をしていた甥おいの駒三郎こまさぶろうという五十二三の男と、中年者の下女お滝たき、その亭主で下男をしている元助もとすけの三人だけ、外ほかに瓢々齋の友達で、下手な雑俳たしなつゆを嗜む露の家正吉やしよきちという中老人、これは野幫間のだいこのような男ですが、筆蹟が良いので瓢々齋に調法がられ、方々の献句けんくの代筆などをして、毎日のように入り浸びたつておりました。

変死人を病死の体にした駒三郎と元助夫婦は、さんざんの小言を食った上、責任者の駒三郎は番所に引かれ、家の方は友達甲斐に露の家正吉が、元助夫婦を指図して、どうやらこうやら、仏様の恰好をつけておりました。

「大変だね、宗匠」

「あ、銭形の親分、——瓢々齋もとうとう死んでしまいましたよ」

正吉は平次の顔を見ると、いそいそ飛んで来て、訊かないことまでも説明してくれます。その言葉によると、今朝庭の池の中に、瓢々齋が上半身浸っているのを、下女のお滝が見付け、亭主の元助を呼んで一緒に引揚げると、頸には麻縄が固く結び付けてあり、縊り殺して池へ投げ込んだことはたった一と目で判ったということです。

平次とガラツ八は、死体を見せて貰い、庭も一と廻りしましたが、さて何の変ったところもありません。

「元助を呼んで貰いたいが」

「へエ」

正吉は飛んで行って、人相のあまりよくない、無精髯の五十男をつれて来ました。

「お前は元助だね」

「そうだがすよ」

元助は平次の前へヌツと突つ立つたまま、およそ無愛想な様子を見せます。

「いつからこの家うちに居るんだ」

「奉公してから二十六年になるがね」

平次もそう聞くと、ちよつと予想外でした。こんな人相の悪い男を二十六年も使っているのは、よくよくの事情があるか、でなければこの男は見かけによらぬ善人で、主人に腹の底から信頼されたせいでしょう。

「お神かみさんは？」

「あれは二十年にもなるかな、——五六年前に主人が仲人なこうどで、縁遠い同士一緒になっただよ」

そんな事をツケツケと言つてのける元助です。

「主人が夜中庭へ出たのを知らなかったのかい」

「俺の寝ているのは家の向う端だ、知るわけはねえ」

「駒三郎は？」

「これも知るめえよ、滅多に家に居ることのない人間だから」

「そいつはどういうわけだ」

「番頭さんは、まだ若いだ、へッへッ」

元助はそう言つて口を緘つぐみます。若いと言われる駒三郎さえもう五十の上でしょう。

「主人はちよいちよい夜分に外へ出るのかい」

「それは判らねえ、が、雨戸を開ける音はチヨクチヨク聞くだ」

「何の用事で外へ出るんだ」

「へッ、そいつは知らねえ」

そう言いながら、元助の怪奇な顔がニタリと笑うのです。

「知らないでは済まないぜ、——お前の心当りだけでも言ってみるがいい」

平次は大事な鍵カギを見付けると、その微妙な感触を追つて、ジワジワと追及しました。

「金でなきや女の事だんべいよ」

「？」

元助の言葉はそのまま謎でした。が、追及したところで、これ以上解るところへは行き
そうもありません。

「勘当された倅があつたはずだが、あれはどこに居るんだ」

平次は話題を転じました。

「あれだよ、——あの家に居るだ。旦那が横山町の店に居なさる頃、この寺島の寮の隣の空家と、三百両の金をつけて久離切っただ。金は一年経たないうちに費^{つか}つてしまつたが、家は辺鄙^{へんび}で買手が無いから、今でも自分で住んでゐるだ」

「……………」

いかにもありそうな事でした。平次はうなずいて次を促します。

「大旦那が店を仕舞つてこの寮へ引つ込むと、勘当した俵の面見^{つら}たくなひと言つて、境へ頑固^{がんこ}な生垣を結わせ、三年越し口もきいたことのない仲だ。こんな反^{そり}の合わなひ父子^{おやこ}を、おら見たこともねえ」

元助はそんな事まで言うのです。瓢々齋の寮の立派さに似^にず、勘当した俵佐太郎の家と、いうのは、わずか二た間ほどの小さいもので、仕切りの金目垣^{かなめがき}は、いやが上にもよく茂り、野良犬の通路とも見えるかなりの穴が一つある外には、木戸一つない因業^{いんごう}なものでした。

番頭の駒三郎は、係り同心漆平馬うるしへいまの手で、嚴重に調べられました。が、昨夜は一と晩、内々小梅に囲っている、お為ためという女のところに、宵から朝まで居たことが判つて、これは無事に帰されました。

隣に住んでゐる倅の佐太郎も、親父との仲があんまり悪かったので、一応は調べられたのですが、これは講中のことで品川へ行つて一と晩留守、家には暮から重病で寝ている女房のお松まつと、六つになる孫の春吉はるきちのたつた二人だけ、淋しく留守をしていたと判つて、これも疑いの圈外へそれてしまいます。

残るのは奉公人の元助とお滝の夫婦者だけ、これも二十年間無事に奉公した人間ですから、人相が悪いとか、貯えが多過ぎるとかでは主殺しの疑いをかけるわけに行きません。すると、下手人は外から入つたことになるわけですが、家の外から庭へ入るのは内木戸が嚴重で容易でなかつたのと、わぎわぎ庭へ呼出して、頸くびに繩を付けて、池に投ほうり込まれるまで、瓢々齋が音も立てなかつたということは、どう考えても少しテニヲハが合わなくなりません。

その晩、いざ神田へ引揚げようという時、

「八、こいつは少し変じやないか」

平次はいきなりこんな事を言うのです。

「何が、変で？ 親分」

「瓢々斎は金があつて、曲りなりにも雑俳でもやる風流人だ。どう間違つても自害する氣遣いはないと思つたのが、——少し怪しくなつて来たよ」

「すると、あれが自殺だというんですかい、親分」

これはガラツ八の方がよっぽど驚きます。人間は、自分の頸を絞めて死んでしまつてから、池へ上半身を突つ込むなんて器用なことが出来るはずありません。

「一応人手に掛つて死んだように見えるが、外から入つて殺した様子はなく、一番怪しい駒三郎は留守だつたんだから、疑えば元助夫婦だけだ、——その元助夫婦が主人の死んだのも知らず、自分の罪を隠す何の細工もせず、朝までぐっすり寝ていたのは変じやないか」
「なるほどね」

「疑いを駒三郎か元助に持つて行くように出来ているが、俺はどうも、大変な細工があるんじゃないかと思う」

「……………」

ガラツ八は親分の考えを測りかねて、長い顎を天に突き上げます。

「麻縄の新しいのは、水へ漬けるとギョツと縮むだろう、——瓢々齋が自分の顎を絞めて、いきなり池へ逆様に飛込んだとしたらどうなると思う」

「へエ——」

「麻縄はギョツと縮んで喉へ食い込むから、水ぶくれになった死骸は、人に絞め殺されて水に投げ込まれたようになるだろうと思うが——」

「驚いたね、親分」

「その証拠は、池のあたりは柔かい土だが、踏み荒らした跡は一つもない」

「……………」

「明日は一つ池を漑つてみよう」

平次の考えは不思議なコースを辿つて、先から先へと発展している様子です。

「親分の言い草じゃねえが、金があつて風流人だった瓢々齋が、何が気に入らなくて死ぬ気なんかになつたでしょう」

ガラツ八は新しい問題を出しました。

「そいつは俺にも解らねえが、酒の好きなものが、何かわけがあつて酒を止すと、急に死

にたくなるんじやあるまいか——」

「そんな事があつた日にや、酒も滅多に断たれねえ」

「瓢箪供養までやつて、いよいよ酒を止したという晩、フラフラと死ぬ気になつたのは、そんな事じやないかな」

これもしかし平次の想像に過ぎません。

ガラツ八の八五郎は、それを後ろに聞いて、お勝手から、瓢々斎の部屋を捜してありますが、

「親分、恐れ入った、——さすがは見通しだ」

何やらワメキ散らしながらやつて来ます。

「何を騒ぐんだ、八？」

「瓢々斎の居間の押入に、飲みかけの貧乏徳利が一本、猪口ちよくが一つ隠してありますぜ」

「どれどれ」

手に取つて嗅いでみると、猪口にはまだ酒の匂いが残つて、一升入りの徳利は半分ほど空になつております。

「こいつを知らなかつたのかい」

ガラツ八は貧乏徳利を指して、うろうろしている下女のお滝に訊ねました。

「一向知りませんよ。旦那はお酒の吟味ぎんみがやかましくて、劍菱けんびしを樽たるで取って飲んでいましたから、酒屋の徳利なんか家へ入るわけはありません」

醜みにくい四十女のお滝は、恐る恐る灯あかりの中へ顔を突出します。

「その樽はどうしたんだ」

と平次。

「昨日瓢箪供養に持出して、残った酒をみんな塚へかけてしまったようです」

それを聞くとガラツ八は舌したなめず舐なりました。勿もつた体たいなくてたまらない様子です。

「それで、この世の思い出の晩酌ばんしやくの分をそつと隠しておいたのだろう」

「なるほどね」

「八、手前は、酒の鑑定めいきは自慢まねだったな」

「それほどでもねえが」

「その徳利に残ったのを嘗なめてみてくれ。劍菱けんびしか地酒か、それが判りゃいい」

「それくらいのことなら判りますよ」

ガラツ八は徳利の酒を一口、上戸じょうごらしく、喉をゴクリと鳴らしました。

「どうだ、八」

「これは良い、——地酒なもんですか、劍菱ですよ、こんなのは滅多にこちとらの口へ入らない」

ガラツ八はもつと欲しそうに、ピタピタと舌を鳴らします。

「やはり死ぬ気だったんだね。本当に酒を止す気で瓢箪供養をしたのなら、たった一升だけ貧乏徳利に劍菱を残しておくはずはない、——夜中に急に飲みたくなれば、お滝を酒屋まで一と走りさせて、まずい酒でも何でも買わせるだろう」

平次の推理は、事件を次第に怪奇な——が犯罪性のないものにして行きます。

「自殺と決つたら長居は無用だ。引揚げましょうか、親分」

「待つてくれ、もう一つ、この手紙は誰が書いたか、元助と宗匠に鑑定して貰おう」

平次は——瓢々齋は人に殺されたに違いない——と、石原の利助のところへ投込んだ、無名の手紙を取出して、露の家正吉と元助に見せました。

「見たこともありませんよ、親分」

能筆のうひつで聞えた正吉は、蚯蚓みみずののたくつたようなのを見て苦笑します。

「元助は？」

「へッ、おらには判りませんや」

元助はニヤリニヤリとしております。自分の無筆むひつを恥じての照れ隠しでしょう。

「上手な筆蹟を、わざと下手へたに見せたんじやあるまいね」

平次は正吉に訊ねました。

「そんな事はありませんよ。下手は上手の真似が出来ないように、上手は下手の真似は出来ないものです。字の呼吸や字配りを知っていると、左手で書いても、口で書いても、何となくうまさの出るものです」

正吉の言うのは尤もつともでした。

「死んだ瓢々齋の字は？」

「あんまり上手じゃありませんが、こんな下手じゃありません。それに筆や墨がひどく悪いし、たったこれだけの文句に間違った字や、仮名違いが三四ヶ所あるでしょう。雑俳でもやる人間は、そんな事はしません」

これで、瓢々齋佐兵衛が、自殺した後で変な手紙が御用聞のところへ届くようにしたのではないかという、尤もらしい疑いも成立しないことになりました。

四

翌^{あく}る日、池^{いけ}漑^{せき}に行つた平次とガラツ八は、あまりの事に仰天しました。瓢^{ひょう}々^々齋^{さい}の遺^{のこ}した寺島の寮は、店仕舞と煤^{すす}掃^はきと壊^{こわ}し屋を一^{いっ}ぺんに嫉^{けしか}けたほどの荒らしようです。

門も、玄関も家の中も、——柱を抜き、床を剥^はがし、天井も壁も、物の蔭という蔭は、手のつけないところはあります。

「これはどうしたことだ」

平次はさすがに気色^{けしき}ばみました。

「主人の遺した借金が、少しばかりではございません。その始末をするにいたしましたとしても、主人は何の遺書もなく、有つたはずの金も、どこに隠してあるか、一両^まと纏^{まと}まつたものも見付かりません。いたし方がないので、支配人の私が、先代と懇意な正吉さんと相談の上、奉公人の元助夫婦立会いの上、家中を捜してみました」

番頭の駒三郎は、悪びれた色もなく、こんな事を言っているのです。

「身内、親類の者に相談してはどうだ」

平次は唾^{つば}でも吐^はきかけた心持でした。余りにも見え透いた弁解^{いひわけ}です。

「お気の毒なことに、御主人には身寄りも親類もございません」

「倅の佐太郎は隣に住んでいるではないか」

「あれは身持が悪いから、すえしじゆう未始終親の頸に縄をつけ兼ねない奴だとおっしゃって、七年前に久離切つて人別にんべつまで抜きました。隣に住んでいても口を利いたこともございません。

主人が亡くなったからといって、あの方を引入れては、支配人の私が相済みません」

駒三郎の言い分は、一応もつと尤もですが、平次には、その冷たさがなんとしても氣に入らなかつたのです。

「そういったものかな、おおだな大店の支配人の物の考えようというものは。——が、これから名主なぬしか五人組の立会いの上でなきや、勝手な真似は止よした方がいいぜ、つまらねえ疑いを受けることになるから」

「へエ——」

駒三郎も仕様事なしに承服しました。

「で、金があつたのかい」

「横山町のお店を畳んだ時、五千両は残したはずですが、家の中を見ると、たった一両もいんぎんいません」

「皮肉だな」

ガラツ八はヒヨイと口を出して平次に睨にらまりました。

「それほど念入りに搜したのに、どうして池の水を干してみなかつたんだ」

「親分さんが、昨夜、——池は明日漂さらつてみるとおっしゃったものですから」

駒三郎にもそれくらいの遠慮はあつたのでしよう。

「一体、当座の払いというのはいくらあるんだ」

「これだけでございます」

駒三郎の出した書付を見ると、愚にもつかぬ諸払いがざっと十二三両、それも出入りの人足の手間や、酒屋米屋の払いなど勘定してあるのです。

「これが万両分限の瓢々齋の残した借金かい」

「へエ——」

「地所や家作もうんとあるということだ。こんな無法なことをしなくたって、諸払いの恰好はつくだろう。庭石一つ、掛物一本売つても十二三両の始末はつくじやないか」

「へエ——」

駒三郎は正に一言もありません。下男の元助は、醜い顔をひん曲げて「それ見た事か」

と言いたい様子です。

そんな事をしているうちに、ガラツ八は小さい水門を抜いて、池の水を干しました。深さ三四尺、たった五六坪ほどの池はみるみる綺麗に水を抜かれて、よく手の届いた底を見せます。

「何にもない」

ガラツ八は少し物足りない様子でした。

「なきやなくていい、——どれ」

平次は駒三郎を追いやって、池を念入りに覗いてみました。蓬もよもぎ菖蒲もしょうぶ芽を吹かない池は、岸の草まで、冬枯れのままで、何の変哲もなく底をさらしているのです。

「おや？」

平次は岸の泥の中から変なものを抜き出しました。

「子供の玩具おもちゃじやありませんか、親分」

「笛だよ」

泥を拭くと、赤い段だら横縞よこしまを書いた玩具の竹笛で、まだ少しも傷いたんでいないところを見ると、昨今池の水際みずぎわの泥に突き差したものでしょう。

「誰のでしょう」

ガラツ八は眉まゆをひそめました。

「こいつはとんだ獲物かも知れない。黙っているんだよ」

「へエ」

平次は八五郎に口止めをして、竹笛をそつと袂たもとに入れました。

「さア解らねえ、何もかも判じ物だ」

ガラツ八は忌々いまいましそうに大舌打をしました。

「俺には段々解つて来るような気がするよ」

平次は何か他のことを考えている様子です。

「第一に解らねえのは、死ぬ覚悟をした人間が、何だつて瓢箪供養なんて、手数のかかる事をしたんだろう」

「何十年の間大事にしてきた、三十六の瓢箪を、自分と一緒にこの世から暇いとま乞こいをさせたかつたのさ。酒好きの考えそうな事だよ」

「へエ——そんなものかなア、俺なんか酒は嫌いじゃねえが、まだ瓢箪と心中する気になつたことはねえ」

「枀ますの角すみからばかり飲むからだよ」

「違ちがえねえ」

八五郎は掌てのひらで額ひたいを叩きました。正に一言もない態ていです。

「そこで一つ、駒三郎か元助に、これだけの事を訊いて来てくれ、——瓢々齋は瓢箪を供養するのむきすに、無瑕むきずのまま埋めたか、それとも後で掘り出して使われないように、いちいち割るか切るかしたか」

「へエ——」

「それから、まだある。——瓢箪を土手下まで持つて行くのに、人手を借りたか借りないか」

「それだけですか、親分」

「まあ、そんな事でいい」

ガラツ八は飛んで行きました。

五

翌^{あく}る日の朝。

「大變ツ、親分」

鉄砲玉のように飛んで来たのがガラツ八です。

「わツ、虫の毒だぜ、手前^{てめえ}と付き合っていると、落着いて飯も食っちゃいらねえ」

平次は文句を言いながらも、大したイヤな顔もせず、この早耳の天才を迎えました。

「落着いて飯なんか食っていらねえ、大變なんだ、親分」

「いつもの大變とは少し大變が違うようだね、どうしたんだい、一体」

「駒三郎が殺されましたぜ、親分」

「何？」

「場所は向島の土手下、瓢箪塚を掘り荒らした前だ」

「本当か、それは、八」

「本当も嘘もねえ、大變な騒ぎだ」

「よしッ」

銭形平次は箸^{はし}を投^{ほう}り出すと、羽織を引っかけ、十手を懐^{ふところ}にねじ込みざま、ガラツ八と一緒に飛び出します。

「まあ」

よき女房のお静は、呆氣あつけに取られてその後ろ姿、朝の春光の中に消え行く二人を見送りました。御用のことという、まるで火の付いた鼠花火ねずみはなびのように飛出す、夫の平次が少し怨めうらしかったのです。

一方平次とガラツ八は、向島まで駆けて行く道々、先刻の会話を続けました。

「手前、瓢箪のことを誰に訊いたんだ」

割って埋めたか、無瑕むきずのまま埋めたかという——あの一件を平次は指すのでしよう。

「駒三郎に訊きましたよ。すると駒三郎は——主人は誰かに掘出して使われると嫌だからと言って、わざわざ職人を呼んで、三十六の瓢箪をいちいち横真二つに挽き割らせ、それを自分で合せて、紐ひもで縛って埋めましたよ——と言いながら、何か変な顔をしていましたよ」

「それから」

「瓢箪を運んだ話も、——一つ一つ自分で運ばなくなっていたいいわけですが、あの通りの気風で、何でも自分でしなきゃ気に入らないんで——そんな事を言ったのも駒三郎です」

ガラツ八は昨日きのうの報告をもう一度くり返しました。

「しまったよ、八。駒三郎はそれを訊かれたんで、死ぬような事になったんだ」
平次は思いも寄らぬ事を言います。

「それは、どういうわけで？ 親分」

「解るじゃないか、三十六の瓢箪に五千両の小判を隠したと気が付いたんだ」

「えッ」

「瓢箪の口からは小判は入らない。瓢箪に隠すなら、横に割るより外に工夫はない。俺はそれを訊きたかつたんだ。それで瓢々斎が死ぬ前の日に瓢箪供養をしたわけもよく解る」

「そいつは本当ですか、親分」

ガラツ八は、平次の袖を押えました。五千両の小判というと、大商人の大身代です。それを大小三十六の瓢箪に隠すというのは、何ということでしょう。

「駒三郎は曲くせもの者だ、五千両の金をさがしあぐんでいるところへ、その事を聞いてハツと気が付いた。たぶん夜になるのを待ち兼ねて行つたんだらう。寮から土手の瓢箪塚は三十間とも離れちやいない」

「……………」

「塚を掘つて瓢箪を取出したところを、出し抜いた仲間の悪者に見付かり、その場を去ら

ず殺されたんだろう」

「なるほどね、まるで見ていたようだ」

そんな事を言っているうちに、足の早い二人、渡し船を飛出して、寺島へ着いておりました。

土手下の瓢箪塚のあたりは、真つ黒な人ばかり、利助の子分が二三人、声を漚らしてそれを追っ払っております。

「銭形の親分」

利助の子分達も、掛り合いで来ている露の家正吉も、ホツとした様子です。

人垣を分けて飛込んだ平次も、自分の予想と寸分違わぬ現場の様子に、物をも言わずに立ち竦みました。それは実に恐ろしい暗合です。

瓢箪塚は無慙に掘り荒らされて、中から取出した瓢箪は、一つ一つ合せた紐を切つて割られ砕かれ、その瓢箪の殻と泥の中に、脳天を胡桃のように叩き割られた駒三郎は、紅に染んで倒れていたのです。

「親分、こいつは誰の仕業でしょう？」

露の家正吉は恐る恐る顔を出しました。

「恐ろしい力のある野郎だ」

平次はそう言つて、駒三郎の脳天を叩き割つた、泥と血潮だらけな鍬くわを指さしました。

「後ろへ忍び寄つて、自分の使つてゐる鍬で打たれるのを、知らずにいたでしようか」
ガラツ八はさすがに急所に気が付きます。

「夜更けなら知らずにいるはずはない、たぶん仲間だろう」

「仲間？」

「だが、お気の毒なことに小判は瓢箪の中になかつた」

「どうしてそんな事が判るんです、親分」

「割つた瓢箪はたつた五つだ、あと三十一は紐で縛つたままになつてゐる、持上げるか振つてみるかして、みんな空からっぽなんで諦あきらめて行つたんだらう」

「人間一人を無駄に殺したわけだ」

「駒三郎も殺されるような事をしていたんだらう、それにしてもイヤな事だな」

平次はひどく不機嫌です。

その時、小梅の方から飛んで来た女が一人。

「駒三郎さんが殺されたんですつて、そんな事が本当にあるんでしようか」

取乱した風で瓢箪塚へ来ると、駒三郎の死体を一と目、ワツと取りすぎりました。

「あれは誰だい」

と平次。

「お為ですよ」

ガラツ八は囁きました。

お為はあたり構わぬ 大愁歎で、

「お前さん、なんて事だろうね、いつも命を狙っている者があるって口癖に言ってたけれど、まさか、こんななるうとはねえ、——きっと敵は討ってやるから、一と言、たった一と言いつておくれ、やっぱり、あの佐太郎かい、——自分が勘当されたのをお前のせいにしていたそうだから、——ね、駒さん、ね」

惨憺たる死体を揺すぶり揺すぶりの大口説です。

六

お為の歎きを聞捨てて、平次とガラツ八は寮の裏へ大廻りに、佐太郎の家へ行きました。

「あれは、親分？」

眼の早いガラツ八が指さしたのは、朝陽を明々あかあかと受けて、昨夜から干し忘れたらしい半纏はんてんが一枚、裏の物干竿に引っかけたのです。

近寄つて見ると、胸のあたりへなすり付けられた血潮と泥。

「……………」

平次は黙つて眼を見張りました。

「ね、親分、これだけで証拠は沢山でしょう、佐太郎の奴をしょつ引いて行きましようか」
ガラツ八は囁きます。

「証拠はこれ一つでたくさんだ、佐太郎は下手人じゃないよ」

平次の言葉は予想外でした。

「親分」

「不足らしい顔をするなよ、——俺もお為の言うのを聞いて、てつきり下手人は佐太郎と
思い込んだが、ここへ来てみると気が変つた」

「へエ——」

「どこの世界に、血の付いた半纏を、これを見て下さいと言わぬばかりに、天道てんとう様の下

にさらしておく下手人があるんだ」

「……………」

「それに、あれは昨夜取込み忘れた洗濯物で、まだ洗って手を通していないよ。あんなに袖なんか突つ張っているじゃないか、洗濯物を胸に当てて、人を殺す奴もないだろう」

「……………」

「まだある、下手人の着物なら、血が飛沫しぶいているはずだ、あれだけひどく殴ったんだもの、——ところがあれは血を拭ふいたんだぜ」

平次の言葉は星を指すようです。

「なるほどな、恐れ入った、さすがは銭形の親分」

「おだてちやいけない」

二人は踵くびすを返そうとしました。

「銭形の親分」

不意に後ろから呼ぶ者があります。振り返って見ると、三十二三の小意気な男が、雨戸の蔭から、丁寧に挨拶しているのです。

「お前は？」

「佐太郎でございます、——今のお話は他所よそながら聞いてしまいました。有難うございます。親分さん方が、そんなお心持とは知らずに、不貞腐ふてくされて知ってることも申上げず、親父が死んでも顔を出さずにおりました」

佐太郎は陽の中へ顔を出すと、頬を濡らして泣いていたのです。

「お前は大した悪人でもないようだ。何だつて勘当されたり、奉公人にまで遠慮をしなきゃならないんだ」

平次は濡れ縁に腰を掛けました。

「勘当されたのは、これと一緒にになったのが切っかけで——」

佐太郎は後ろをふり返ります。枕屏風まくらびょうぶの蔭には長患いの女房お松が、形ばかりの夜の物を着て青白い顔をのぞかせているのです。

「それはどうも腑ふに落ちないよ、——お神さんは商売人あがりというわけでもなかったそうだが」

「あんなに親父が腹を立てるとは、私も知りません。ツイ一緒になってしまうと、火のついたような怒りようで、この家と三百両の金を貰って七年前に久離切られました。それからは呑む、打つで」

「父親が、お前を傍へ置きたくない事でもあつたんじやないのかな」

「そんな事があつたかも知れません」

「何か変つたことに気が付かなかつたのか」

「そういえば駒三郎は甥でも従弟でも何でもないのに、世間へは親父の甥と触れ込んで、店の事を一切取仕切つておりました。——それから、元助も、奉公人のくせに、恐ろしく贅沢で、親父にせびる事ばかり考えていたようでございます」

佐太郎の話には、何か深い仔細がありそうですが、平次の勘でもこればかりは解りませぬ。

「お前はどこで育つたんだ」

「遠州ですよ、——里にやられて十二三まで育つた頃、江戸から迎いが来て引取られたのが、今の親父の横山町の店です」

「駒三郎か元助を、子供の時見た覚えはないのかな」

「少しも覚えがありません、江戸へ来て始めて見た顔です。もつとも、露の家正吉という男には見覚えがあります。あれは左の耳に瘡があつたはずですが、いつの間にやらそれはなくなっていました。二十七八年も前に、浜松で見た顔です」

「そいつは何かの役に立つだろう」

しかし、佐太郎からさぐれる話はそれつきりでした。立上がって帰ろうとすると、チョコチョコと飛んで出たのは、六つばかりの男の子、小柄で色白で、男人形のように可愛らしいのが、大した人見知りもせず、平次とガラツ八の前に立ってニコニコしております。

「これは、お前さんとこの総領かい」

「春吉と言いますよ、まだ六つになつたばかりで」

「こんな可愛い孫があるのに、瓢々齋おしの祖父さんも、ろくに顔も見ずに死んだんだらう、気の毒な」

思わずそんな事を言う平次、佐太郎はさすがに顔を背そむけました。屏風の蔭では鼻すをする音が――

「おや?」

ガラツ八はつと足下を見ました。気のきいた懐中煙草入ふところうたばこいれが一つそこへ落ちていたのです。

「こいつはお前めえのかい」

平次はそれを拾って、佐太郎に見せました。

「とんでもない、そんな洒落しやれたものを持てる身分じゃございません」

「こいつはとんだ良い物が手に入ったよ」

平次はそれを懐中に入れて、立去りました。

七

その足で平次は、遠州浜松の城主七万石松平豊ぶんご後守の上屋敷に飛んで行き、御留守居の役人から何やら聞き出しました。

「今日の仕事は少し大きいが、合点か、八」

門を出ると、いつになくいきり立っております。

「どんな事をやらかしゃいいんで？」

「まあ来てみるがいい」

二人はもう一度向島へ、——もう日は暮れかけております。

瓢々齋の遺した寮へ行くと、平次はいきなり下男の元助をつかまえたのです。

「御用ッ」

「あツ、何をするんだ、縛られる覚えはねえ」

「黙れツ、今から二十八年前、浜松の城下で、御用金三千両盗んだ大泥棒の片割れ、てめえ手前は般はん若にやの元吉だろう」

「あツ」

「八、そいつを縛ってしまえツ」

「応おうツ」

乱闘は一瞬にして終わりました。元助の元吉は八五郎に組伏せられて、キリキリ縛り上げられます。

「もう一人居るんだ。そいつは番屋へ預けて、一緒に来い」

平次とガラツ八は、引返して中の郷なかごうへ飛びました。

露の家正吉の家へ裏表から入ると、

「あ、これは銭形の親分、ちようどお茶が入ったところだ、まず一服などと言うのを、」

「御用だぞ、遠州の正太、神妙にせい」

平次の十手はピシリとその肩を打ったのです。

「あツ、俺はそんなものじゃない、この露の家正吉は、縛られるような悪事を働いたこと
はない」

「黙らないか。二十八年前三千両の御用金を盗んだ四人組の一人、その左の耳の瘤こぶを取つた疵痕きずあとが何より証拠、浜松様の御屋敷に聞き合せての上だ、間違いはない」

「嘘だ嘘だ」

「その上五千両の金を搜して、駒三郎まで殺したはずだ、神妙にせい」

「違う違う、あれは元助の仕業だ」

「いや元助じゃない、佐太郎に罪を着せるつもりで細工をしたのは、手前の悪智恵だ」

「その証拠は——」

「この懐中煙草入が物を言うぞ、印伝いんでんの吠かますに銀煙管、こいつは下男かみの持つ品じゃねえ」

「えッ、こうなれば頭巾ずきんを脱いでやろう。いかにも俺は遠州の正太、安岡っ引に縛られる
ような三下さんしたじゃねえ」

「何をッ」

「ここでも乱闘は瞬時に片付きます。二十八年前の巨盗は、口ほどにもなく、平次やガラ
ツ八の敵ではなかつたのです。」

二人を縛つて番屋に並べ、証拠を揃えてピシピシ平次は締め上げました。こうなると、もう嘘も隠しありません。

今から二十八年前の旧悪、瓢々斎佐兵衛と駒三郎と正吉と元助の四人が、浜松の御用金三千両を盗んで高飛びし、四人で均等に分配して、別れ別れで正業に就くはずでしたが、本当に正業に就いたのは、後の瓢々斎こと佐兵衛たった一人で、あと三人は半歳経たないうちに費い果し、二三年後には横山町で大商人になつていた佐兵衛のところへ転げ込んで、さんざん嫌がらせの限りを尽しながら食い下がっていたのでした。

商才のある駒三郎は甥と名乗つて番頭になり、人相のよくない元助は下男に、文筆のある正吉は我儘者わがままもので友達ともということになりましたが、二十六年間三人の搾しぼつた額は容易なものではありません。

佐兵衛は商売上では申分なく成功しましたが、この旧悪がいつ露頭するかも知れないのを恐れて、倅佐太郎を難癖つけて勘当し、寺島の寮の隣に住まわせましたが、三人の悪人に見張られて表向きの交通もなり難く、さんざん搾られ脅かされた挙句、とうとう自殺をして、この旧悪の責苦から逃れる工夫をしたのでした。

自殺を他殺と見せたのは、駒三郎や正吉や元助に対する嫌がらせで、瓢箪供養は五千両

の金の隠し場所をカムフラージュする洒落しやれでしょうが、それにしても、真物ほんものの五千両は、一体どこに隠してあるのでしょうか。

二人の悪人を、下つ引に護まもらせて奉行所に送らせた後、平次はガラツ八と二人、小判捜しで荒らされ抜いた寮の縁側に腰を掛け、湿しめっぽいような春の月に照されて、いつまでもいつまでも考えておりました。

「八、考えてみる、五千両という大金だ、この寮のどこかに隠してあるに違いない。それを捜さなきゃ、この仕事は仕上がったとは言えねえよ」

「五千両は大きいね、親分、五千両大福餅を買ったらどんな事になるだろう」

八五郎は相変らずこんな事を言うのです。

「馬鹿野郎、大福餅を五千両食う奴があるものか」

「一朱の家賃を先払いにしたら、何年気楽に住めるだろう」

「呆あきれた野郎だ、手前の言うことは、いちいち子供染みているよ、——子供と言や、いつかこの池で見付けた玩具おもちゃの笛だが、こいつがどうも一と役買っているような気がしてならねえ」

「そいつをピーと吹くと、親分も子供付き合いが出来るといふものさ」

「その気で一つ吹いてみるか」

平次はそう言いながら、竹笛を口に当てて、二つ、三つ、ピー、ピーと吹いてみました。「こいつは夜つびて吹いたって、浮れる気遣いはない、が、とんだ愛嬌あいきょうがあつていいね」

二人は声を合せて笑いました。どこからともなく、朧おぼろを染めるような梅の匂い――。

「おや？」

八五郎は早くも気が付いて池の後ろを指さしました。巖がんじょう丈な金目垣、その一ヶ所に野良犬の潜くぐる通路が一つあることは、平次も早くから目をつけておりましたが、その穴をガサガサと潜つて、小さいものがヒョイとこつちの庭へ飛込んで来たのです。

「おや、春吉じゃないか」

佐太郎の一粒種、死んだ瓢々齋の孫に当る、あの可愛らしい男の児が、何の懼おそれ気もなく、縁側に並んでかけている二人の前へ歩いて来るではありませんか。

「小判をおくれよ」

おどろき呆れる平次の前へ、春吉は小さい手を出しました。振り仰いだ顔の可愛らしさ。平次はしばらく呆気に取られていましたが、やがて、何やら吞込んだ様子で、懐中から

小粒を二つ三つ取出して、春吉の掌の上に載せてやりました。悲しいことに、錢形平次の懷中に小判などが入っているのは、一年に幾度もないことだったのです。

「また来るよ」

春吉はギラギラする小粒を、しばらくは怪訝けげんそうに眺めておりましたが、それでも小判の仲間と思つたか、スタスタと金目垣に引返すと、元の穴を潜つて、自分の家の方へ行きます。

「八、あれをどこへ持つて行くか、見張つているんだよ」

「心得た」

囁く二人。子供はそんな事に構わず、気軽に歩いて、お勝手の前の井戸の側そばへ行くと、用心のためにしてある、嚴重な蓋ふたの隙間すきまから、ポトリと中へ投り込んだのです。

「しめたツ、これで五千両の行方ゆくえが判つた」

平次とガラツ八は、表から飛出すと、大廻りに廻つて佐太郎の家へ飛込みました。

*

平次はその晩下谷したやの松平豊後守上屋敷へもう一度行つて留守居の役人に逢い、二十八年前に盗まれた、御用金の三千両を佐兵衛の倅の名で返しました。その上、正太（正吉）、元吉（元助）二人の悪人を召捕つたことを報告して、死んだ佐兵衛の遺族には、掛り合いなしという事にして貰いました。

「こんな清々せいせいしたことはないな、八」

もう夜半過ぎの街を、神田の自分の家へ、二人は軽い心持で急ぎました。

「井戸の中から小判が出たときは驚いたぜ」

とガラツ八。

「それより俺は、竹笛を吹いて子供の出て来た時の方が驚いたよ、——瓢々齋はあの笛を吹いて、人知れず孫に逢い、悪人に狙われている五千両の金を隠させて、死ぬ支度をしたんだね」

平次は何となくホロリとした心持です。

「でも、あれで佐太郎も助かつたわけだね、親分。女房の養生も出来るだろうし、二千両ありや——」

「そんな事は言わない方がいい。みんな忘れてしまうことさ」

「ところで、たった一つ判らねえ事があるんだが、——お品さんが持って来た手紙は、あ
りや誰が書いたんでしょう」

「判ってるじゃないか、佐太郎さ。隣の家で親父が死んだと聞いて、何か、あんな手紙を
書きたくなつたのさ、おや、もう家だよ」

「^{あねご}姐御が待っているぜ」

そのとき女房のお静は、寝もやらず二人の^{あしおと}跫音の近づくのを待っているのです。

青空文庫情報

底本：「銭形平次捕物控（七）平次女難」嶋中文庫、嶋中書店

2004（平成16）年11月20日第1刷発行

底本の親本：「銭形平次捕物百話」中央公論社

1939（昭和14）年

初出：「オール讀物」文藝春秋社

1939（昭和14）年2月号

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：結城宏

2017年9月13日作成

2019年11月23日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

銭形平次捕物控

瓢箪供養

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 野村胡堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>